

チャネルキャットフィッシュの生息状況と捕獲方法

農林総合研究センター（水産研究所）

キーワード：チャネルキャットフィッシュ、外来魚、生息状況、外来生物駆除

1 技術の特徴

チャネルキャットフィッシュは、日本には1971年に養殖目的で導入され、かつては本県や茨城県でも養殖魚として飼育されていた。しかし、本種は生態系や漁業に与える影響が大きいことから、2005年に「特定外来生物による生態系等に係わる被害の防止に関する法律」の「特定外来生物」に指定された。

本県の天然水域では、荒川や中川等で1980年代から散発的に確認されている。しかし、近年、本種の生息が増加しているとの情報があり、生息域の拡大による内水面漁業への影響が懸念されている。

そこで、本種の生息状況を調査したところ、県東部を中心に生息域が拡大していることが明らかとなった。また、本種を駆除するための簡易で効率的な捕獲方法は、水温20～30℃の時期（本県では概ね5～10月）に、活魚または活エビを餌にした置き針を含めた夜間の釣り漁法であった。

2 技術内容

(1) チャネルキャットフィッシュの県内生息状況

2007年以前は荒川下流、中川、隼人堀川、葛西用水路、笠原沼用水路であった。今回、新たに利根川、江戸川、福川、入間川、東京葛西用水路、渡良瀬川、川田谷沼（桶川市）での生息が確認され、生息域が荒川水系、利根川水系ともに拡大していることが明らかとなった（図1）。

(2) 簡易な捕獲方法

アンケート結果および各種漁法による捕獲調査の結果では、チャネルキャットは釣り漁具による夜間の捕獲割合が高かった（図2）。

チャネルキャットフィッシュの餌の嗜好性を把握するため、捕獲された本種の胃内容物を調査したところ、ネズミやカメ、甲殻類、昆虫類等、捕食種は多岐に渡っていた。釣り漁具に用いる餌について検討したところ、魚介類（活魚・活エビ）の嗜好が高く、獣肉類（豚脂身・レバー・鳥腐肉）は低かった（図3）。

捕獲適期を把握するため、水温10、20、30℃における夜間の釣り漁法（活魚を餌とした置き針）による捕獲状況を調査した。20℃および30℃では10回中9回以上捕食したが、10℃では10回中2回しか捕食していなかった（図4）。したがって、チャネルキャットフィッシュを水温の低い時期に捕獲することは困難であり、5～10月の水温の高い時期に捕獲することが効果的である。

3 具体的データ

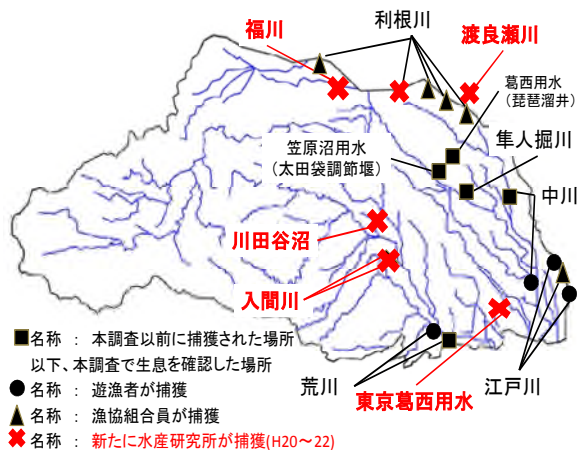


図1 県内生息状況

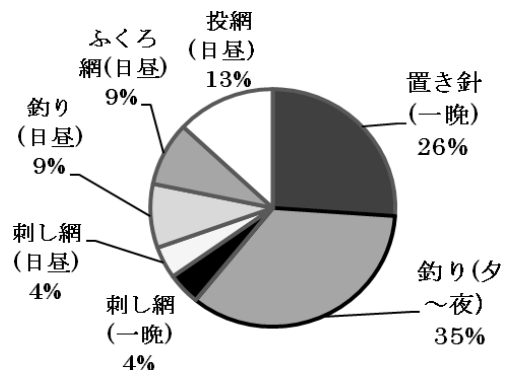


図2 捕獲時の昼夜別・捕獲漁具の比較
(遊漁者・漁協組合員へのアンケート調査及び水産研究所・県漁連の捕獲調査から)

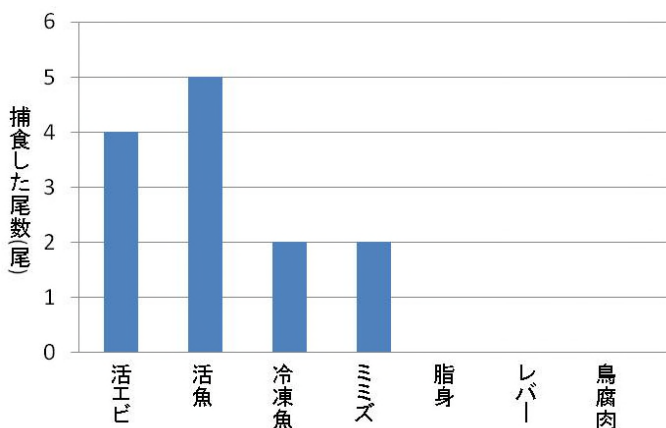


図3 捕獲に用いる餌の嗜好性

(池に1尾を入れて、7種の餌を同時に吊した時の捕食状況を調べた。表示は、9尾実施した内、それぞれの餌を捕食した尾数)

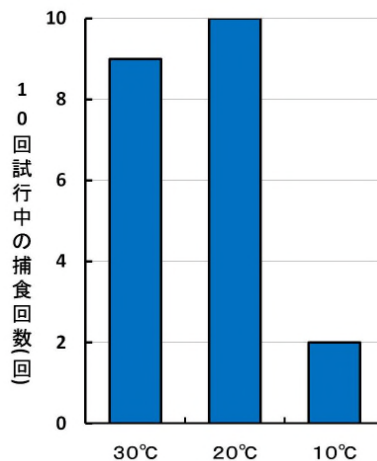


図4 異なる水温下で餌を捕食した回数
(活魚を餌にした置き針を用いた時の捕食回数を調べた。試行回数は10回)

4 適用地域

県内平野部の河川湖沼

5 普及指導上の留意点

- (1) 夜間の釣り漁法は、河川への落下などの危険があるので安全には十分に配慮する必要がある。置き針を行う場合は、他の釣り人に配慮するとともに、杭などに固定したり重りを重くする等仕掛けが流されないようにする必要がある。
- (2) チャネルキャットフィッシュは「特定外来生物による生態系等に係わる被害の防止に関する法律」により放流・移動が、「埼玉県内水面漁場管理委員会指示」により再放流が禁止されている。本種を捕獲した場合には、その場で殺し、調理に活用したり埋設するなど適切に処理する。

6 試験課題名(試験期間)、担当

チャネルキャットフィッシュの生息状況調査と簡易な駆除技術の開発(2008~2010)、魚類資源担当